

一筆架及墨架 玉石木等にて種々の形に造り筆架は多く山形に造り又は動物の形に彫刻す

一筆洗 陶器玉石の類にて造り其形状種々あり美麗なる彫刻を施せり

一筆筒 陶器金屬玉石竹木象牙等にて造り其形種々にして細密なる彫刻をなせるものあり

一机 朱檀黒檀若くは其他の寶木にて造り或は漆器なるあり其大小形状等は種々あり

一茶壺 茶瓶なり磁器又は金屬(銀錫黃銅)より成る磁器は朱泥素焼白燒柿色燒青磁等あり其形種々にして方形圓形橢圓形扁圓形等あり或は手の附きたるもの或は弦の附きたるものあり而して葛藤柳捻紙等の編物の内に收むるものあり

一茶碗 磁器及玉石金屬より造り或は其内面金屬にして外皮は木製なるあり或は椰子の皮にて造り茶瓶と同じく種々の燒方あり又種々の形を有す多くは四個を以て一組とせり

一茶托 金屬陶器木製等あり又中心は鐵板にて外面に磁器を覆ふものあり其形

狀は船狀花輪狀菱形圓形橢圓形等種々なり

一茶合 竹木金屬にて造り書畫の彫刻をなす

一茶盆 金屬(銅黃銅錫銀)磁器竹木漆器玉石にて造り其形状種々にして細密の彫刻をなせるあり

一茶コボシ 磁器及金屬製のものを見るのみ

一湯瓶 藥罐は金屬銅鐵黃銅銀白銀等にて造れり

一烟袋とは煙管なり日本製と略同一にして皿は金屬なるも吸口は金屬又は玉石を以て造り管は竹木なり

一水烟袋は煙管の一種にして金屬にて造り下底の筒中に水を入れ煙をして一回水中を通したる後煙の曲管より口中に來るべくやう造りたるものなり而して煙筒及煙管の掃除器を水筒の傍に附屬せり

一鴉片煙袋は鴉片煙草を吸入する器にして木製管の一端に鴉片を燒煙せしむる金屬の筒狀皿を附着す而して之に附屬する器具は陶器及鴉片入匙箸等にして貴金屬の金具を卷き又寶石等を以て美しく飾れり

家具

- 一酒壺 日本の特利と同じく酒を入れて酌するものなり形茶碗の如く磁器又は金属より造れり
- 一盃 磁器金属玉石硝子木等にて造り其形状は圓形方形六角八角等なり
- 一磁器鉢は盃と大差なきも多くは磁器にして其大小形状等種々なり陶器の破損せしものを修理するには金属のカスガイを以てす甚だ巧なり清國にては皿を碟碟子と云ふ
- 一飯器 陶器及木製にして又漆器の美しきものあり
- 一槍子は箸なり金属象牙木竹等にて造る
- 一肉又は二本叉にして尖端は金属より成り木柄を有す
- 一食匙は金属磁器木竹にて造り其形状種々なり
- 一鍋釜は日本品と大差なし鐵にて鑄造し又銅にて造れるものあり其大小不同並を有するもの少し
- 一八仙卓は食卓にして其形方圓半圓橢圓等種々あり之に椅子を附屬す
- 一水漂は水杓なり鐵又は磁を以て造れり

- 一水桶は水を汲み運ぶに用ゆ石炭油の罐を代用するもの多し
- 一甕は水又は酒醬油酢等を容るゝに用ゆ大小種々にして甚だ堅固なり
- 一柳漚 柳にて造り井戸より水を汲み上げるに用ゆ
- 一庖刀 刀子と云ふ柄を附するあり然らざるあり
- 一籠は竹籠子と云ふ大小種々あり食物を容れ提携する器なり
- 一爐爐 鐵銅及土にて造り大小形状種々あり炭火にて水を蒸或は食物を煮るに用ゆ日本のコンロの如きものなり
- 一火盤 火鉢なり金属陶器兩製あり其形状大小種々にして美を盡せり
- 一火槍子 火箸なり鐵及其他の金属より造る
- 一鐵箱 五徳なり鐵にて造り三脚を有す
- 一袖爐 金属の小なる火入にして蓋と手弦とを有し袖中に入れ温を取るなり
- 一臼杵 日本のもと同じく石又は木にて造り穀物を搗き又は餅を搗くに用ゆ
- 一蒸箱 日本のもと同じく木にて造り方形圓形あり底を柳又は藤にて造る
- 一磨臼は石にて造り甚だ大なり多くは驢馬にて引き廻さしめ或は二人にて之を

廻す

- 一 條 其製法粗にして鎌目大なり
- 一 度量衡 秤は一完の桶にて穀類を量り尺度器は木象牙又は金屬にて造り尺寸分と切目を附す其一尺は日本尺一尺一寸四分に當れり衡器は之を秤と云ひ日本の天秤と同じく衡目は斤兩錢分の名を用ふ
- 一 算盤 は日本のものと大同小異なり
- 一 櫃 衣櫃書櫃食櫃等種々あり二重筆筒の如くにして開戸を有し内に二重三重の棚或は抽出を設けて衣服書籍其他の器物を容るゝに供す外圍は種々の彫刻をなし殊に開扉の如きは美を盡せり寶木にて造り或は塗物あり
- 一 箱 靴と同形にして大なり朱棧楠樫等より造り衣服及日用の器具を藏む
- 一 皮箱 靴なり革製にして衣服及日用の器具を收む又紙製のものあり其大小不同にして表面には赤白種々の塗りをなす又長方形の小皮箱を造り之に金銀財寶を容る其上面は灣形にして旅行の際は之を枕にすと云ふ
- 一 手筆筒 寶木を以て造り抽出を多く有す

- 一 連三卓 卓又は案狀にして抽出を附し又は開扉を有して器具を容るゝに供す
- 一 櫃卓 卓にして下に開扉あり器具を容るべし
- 一 燭臺 金屬又は木製あり硝子の外圍を有し其内に燭火を點す形狀種々なり
- 一 洋燈 普通洋燈空氣燈平心丸心等あり其大小形狀種々なり
- 一 提灯 鐵骨の網に紙を貼附し或は鐵骨にして硝子を嵌するあり又竹骨にして紙を貼するあり其大小形狀一ならず清國にて之を燈籠と云ふ
- 一 時鐘 据時計振り製重垂製等種々にして其形狀は或は八角圓形方形等あり袖時計も其類數多にして金銀銅鐵等を以て造り其形狀裝飾機關等甚だ差異あり
- 一 鍵 鎖鍵子と云ふ日本のものと稍や趣きを異にす是れ服裝の異なる所以なり而して鍵及硝子環紐等も亦多少其形狀を異にせり
- 一 時計囊 布又は革にて造りたる長方形の囊にして文字板の見ゆる如く圓形の窓を穿てり
- 一 磁石 之を指南針と云ふ其形狀種々あり
- 一 寒暖計 之を寒暑表と云ふ

一笠 笱皮者等より造り緒を以て頤下に結ぶ暑を避け又は雨を凌ぐに用ゆ
 一傘 竹骨にして油紙を貼り長柄を有す蝙蝠傘は鐵骨にして布を張り柄を附する等日本のものと異ならず
 一箒 筥箒と云ふ黍殼葉等にて造り庭箒は竹梢にて造れり
 一塵拂 擔子と云ふ鳥毛又は木綿にて造り塵受は竹又は柳を編みたるものに異ならず扇骨は竹象牙獸骨名木等にて造れり
 一團扇 兩面に紙又は布を貼し其周邊に竹木象牙等の縁を附するあり或は附せざるあり或は竹骨製にして邊縁彎曲し或は鳥羽棕栢葉にて製するものあり
 一馬尾用打 蠅拂にして馬尾を以て造り竹木の柄を附す
 一褥 所謂布圍にして多く木綿にて造り富豪のものは絹布を以て製し美麗なる縫を施せり其内容は綿花にして日本のものに異ならず
 一蚊帳 麻布木綿絹布等にて造り多く寢臺の周圍に常に帳し置くもの、如し
 一枕 多くは布製にして其長さ二尺より二尺五寸に至り太さは直径七八寸あり其硬度は恰も硬護謨に類せり其他藤を編みて造り或は木板を以て長方形の箱を

製して枕となし下流民に在ては木片或は煉瓦を枕となせるもの妙からず
 一敷物 多くは草を編みて造りたるアンペラにして之を炕上に敷き之を覆ふに白氈を以てし其上に氈を敷き更に蒲團を敷くを普通とす座蒲團は常に座褥となりて炕上に敷き或は椅子の上に用ゆ
 一剪子 缺なり普通の手鋏にして拇指と示指とにて壓迫し缺するものどす
 一剃刀 巾廣く短くして木柄を有せり
 一小刀 多くは鞘に收め箸等と共に腰に携帯する様造らる
 一手環 金銀玉硝子海松等にて造れる環にして前膊腕部に嵌入し飾りなす種々の意匠を凝して美を盡せり
 一指環も又手環に同じく種々の意匠を廻らし金銀寶玉等を嵌入せり
 一指套 爪形をなしたる貴金屬の管にして美を盡し婦女の環指又は小指に套して飾りとなす
 一鼻煙壺は寶玉貴石瑪瑙水晶等にて造り其形瓶の如し芳香を有する粉藥を容れ常に之を携へ即ち此粉藥を鼻孔に塗布して佳香を嗅ぐを嗜む

- 一耳輪 錯子と云ふ貴金屬に寶玉石等を飾り附け耳朶に通じて婦女の裝飾となす
- 一笄 龍甲玉石金屬等にて造り婦女の結髪に用ゆ
- 一簪官針も又貴金屬象牙骨石球珊瑚瑪瑙等にて成り花形果物鳥蟲等の形に造れり
- 一木梳 櫛なり竹又は木にて造れり
- 一鏡 男女の裝飾用にして常に小さき鏡を袖中に携帯するものあり
- 一斧鋸鑿鉋等は日本のものと大差なし鋸は二人にて兩側より使用するもの多し
- 一鋤鍬鎌等の農具は日本の農具と大差なし
- 一洗面盥は銅黃銅鐵等にて造り或は木製磁製のものあり
- 一杖 棍子と云ふ木竹を以て造り婦女子は足の小なる爲め歩行に難ければ概ね之を携ふ
- 一刷毛 刷毛と云ふ日本製のものに異ならず
- 一馬具 (鞍) 日本式馬具に類似す木骨にして革皮を以て裝具す鞍は恰も西洋の

- 銚の如し藪は草又は竹木にて造れり
- 一尿尿器 支那人の習慣として其貴賤貧富を問はず室内に尿尿器を備へ置き殊に夜間は男女共に之に排尿し男子は瓶に女子は鉢に於てす瓶の形狀は本邦在來の陶器製尿器に異ならず鉢は同じく陶器にして外面磁礮内面は素燒なり其大さ種々あり婦女子は晝夜の別なく之に排泄し滿つれば之を道路に棄つ行人屢朝早く尖尾纖弱の婦女が滿々たる溺器を手にしつゝ屋外に出づるを見るべし富豪或は貴婦人は爲めに殊に一人の家僮を有せりと云ふ
- 一代花針 菜耕針 日本の頭カキに同じきものにして小竿なり又托針と名くるものあり簪の小なるものなり
- 一蠟燭 豚脂或は牛脂を以て造り倒圓垂狀形にして蘆葦に紙を纏絡して心となせり之に點火するに光力薄弱にして煙多く一種の臭氣を發す其燭臺は普通錫より成り本邦佛前に用ゆるものと同一なり
- 一財布 絹或は木綿にて造り其長さ約八寸巾三寸にして長方形を呈す上等の品は美麗なる縫を施せり

○玩具具の種類

嬰兒用の玩具數種あり則ち左の如し

一木人 木製にして着色し其頭首の部分活動す
一人頭 木製にして着色し圓形なり其内部は中空にして碎石又は砂利を容れ動
搖せば音を發す

一蓮蓬 木を以て製す形蓮の實の如し柄を振れば蓮子活動す

一博浪鼓 一に奔豪鼓と云ふ振り鼓にして二個連接したるものあり鐵葉製なり

三四歳より七八歳に至る小兒用の玩具左の如し

一木刀 小なる青龍刀形にして着色し其柄短し

一木鎗 鎗狀に造れり

一鬼臉 我邦の所謂假面なり鬼面怪醜の面貌にして紙を以て製し種々の着色を
爲せり

陰曆四月城隍會に於て此鬼面を蒙り異裝をなすもの多し

一鬪子 馬尾を以て製したる上下の鬪髻にして鐵線を以て之を繋げり

一紙馬 紙にて製したる小さき馬にして紅白黃黑等の着色を施し後脚及尾を備
ふれども前脚なし

一紙帽 紙を以て造れる古代の官帽なり

一摸子 種々の人物動植物の形を爲せる泥製の模型にして粘土を此模型に入れ
て戯むるゝものとす

一風箏風燕 我國の所謂紙鳶にして其形種々あり人物或は鳥蝶等の形を爲し或
は方形のものあり而して其紙鳶の上下兩側に紙製の小輪三四を附し空中に飛揚
するや其小輪儘く回轉し又其風に弦を附し空中に一種の音を發するものあり

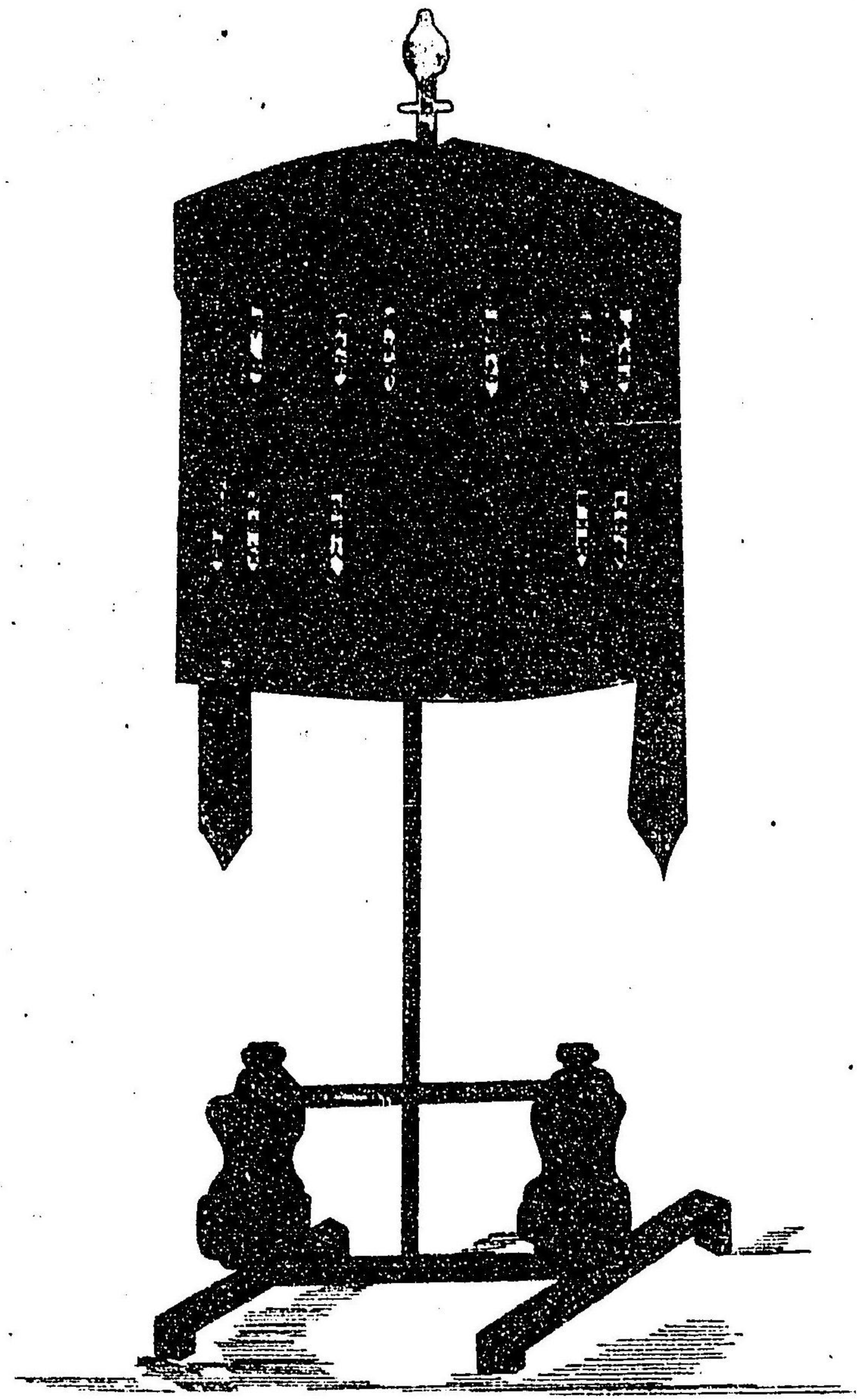
一抖盞盧 一に抖盞葫蘆と云ふ一種の獨樂にして竹にて作れる二個の兩車輪あ
り其軸の中央に糸を附し其糸の兩端に竹の小杆を附し之を以て其車輪を回轉す
れば風に激して一種の音を發す

一彈弓 竹製の弓を附したる一種不細工なる彈鐵砲なり

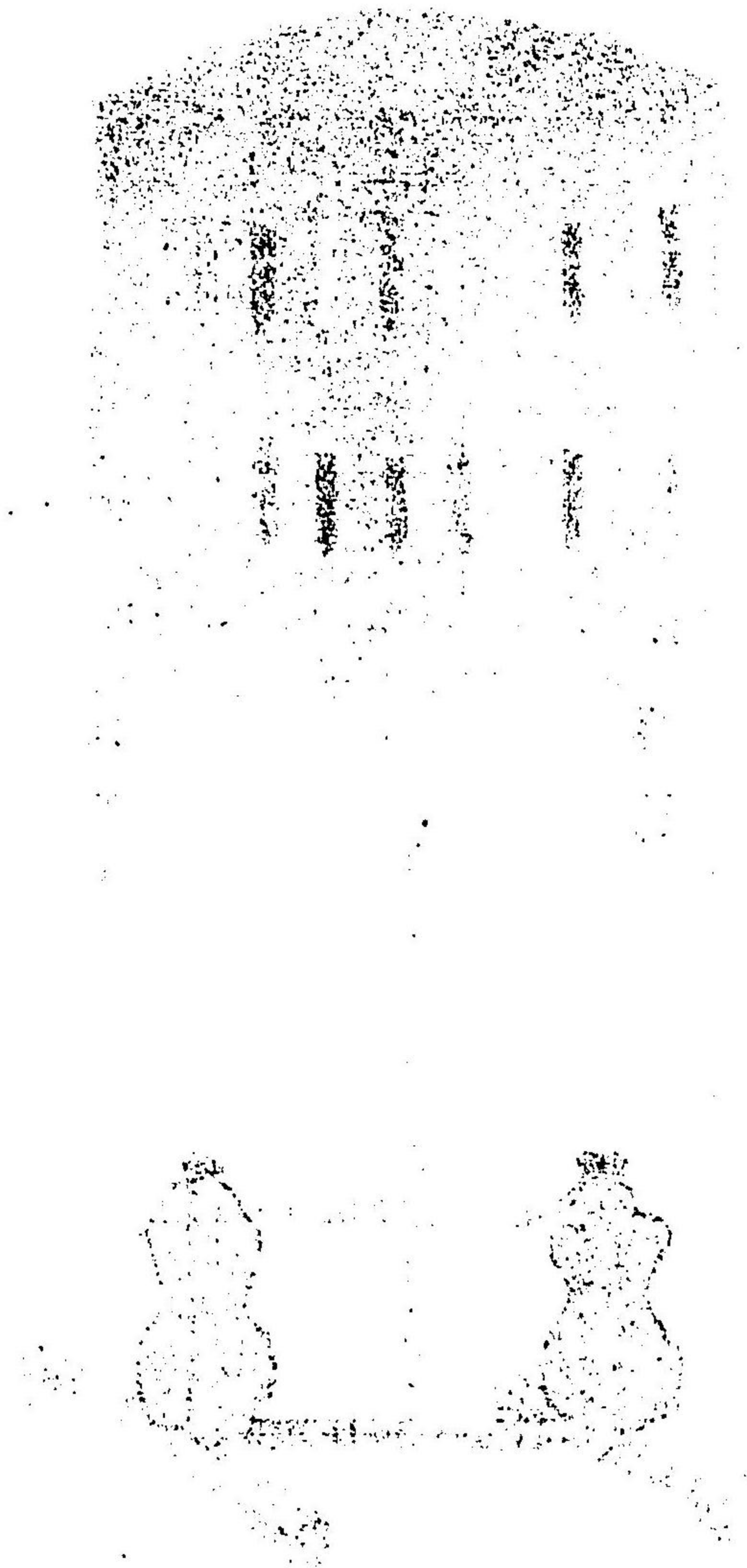
一猛盞盧 又放閃葫蘆と云ふ軸の長さ獨樂なり繩を以て回轉すれば一種の音を
發す

- 一吹箭 竹又は木筒にして一種の短き箭なり
- 一魚燈 紙を貼れる魚形の燈にして柄を附せり
- 一泥人 土を以て造れる兒形の人形なり
- 一荷缸燈 日本にて所謂回轉燈籠なり其畫く所魚蝦人物等の影にして火氣の力を以て活動回轉せしむ
- 一車燈 木を以て骨を造り其外面に紙を貼はす之を索引すれば輪の回轉するに従ひ内に金屬線の弦機ありて即ち鳴る
- 一口哨 呼子笛にして鐵葉製なり
- 一鬼倒對 一種の怪容なる土偶にして背部の糸條を引けば手及頭部の長耳を搖かす
- 一風轉 木製の小圓板に二條の糸を附し兩手に糸を持ちて緩急伸縮すれば其圓板回轉す
- 一攀不倒 日本にて所謂不倒翁なり
- 一小人 泥土又は木造の小人形なり

- 一中凡燈 長方形の燈なり
- 一鞞鞞 人形にして其兩手は横に緊張せる糸狀に連なり其糸端に連なる兩側の小秤を以て人形を搖すなり
- 一轉輪 木を以て羽翼狀のものを製し其中央長軸を竹筒に挿入し其筒の中央にある小孔より糸を通じ其糸を伸縮するに依りて羽狀のものを回轉す
- 一得來風 所謂電話器なり
- 一洋鐵船 鐵葉を以て製せる洋形の軍艦なり
- 一口琴 鐵製にして其簧を彈す
- 一小狗 革又は布を以て造り外部に毛を飾り内部に簧機ありて之を捻するれば即ち鳴る
- 一假鷄 小狗と同一なり
- 一泥球鐵球 足にて蹴蹴し戲となす
- 一彈球 手を以て打ち蹴るものなり綿或は豚鷄の膀胱を以て造り上に糸を纏結す



一 蘇杆龍 日本にて所謂板返しなり
 一 兎持碓燈 方圓の燈籠にして砂を盛りたる器置は火力の爲めに其砂を少量づ
 排漏し其下部に設けたる紙製の小皿に衝突して更に此小皿に接続したる人形
 は之によりて動搖するなり
 一 葦轉燈 上下小なる八稜形の燈籠にして其下部に装置せる小輪を推索すれば
 其燈縱軸に回轉す
 一 龍燈 大小種々あり紙にて造り龍形をなし屈伸自在なり多くは火を點せず
 一 椰子 古の折なり五六歳の兒之を弄ぶ元宵と稱する饅頭の如き食物を賣るも
 の之を之を叩きて行商す
 一 手搖串鈴 多くは銅製なり又鐵製のものなきに非ず六七歳の小兒之を弄ぶ賣
 藥行商者又之を用ゆるものあり串して之を振れば鈴の如く鳴る
 一 大平鼓 木を以て鼓胴を製し紙を貼張して之に花龍を畫き其形圓形八角等種
 々あり之に柄あり其柄端に多く鐵環を附す
 一 小鼓 木製にして其一面に革を張れる扁平の鼓なり形狀種々あり其革に花龍



等を齧けり

一小孩子 小さな人形にして單簡なる様によりて手足を運動す

其他小車馬鞭木碗佛燈棍小刀杓小罐等の玩具あり

玩具は其種類甚だ多くして一々記するに遑あらず然れども一般其構造甚だ單簡にして機巧のもの尠く色彩の配合に注意せず人形の如きは往々猥褻なるもの尠からず近時外國輸入の玩具に模擬したるもの少からずと雖も概して我國に於ける玩具に比すれば數等の下級にあり而して比較的男子的のもの多く女子的のものは十中一二に足らず凡て家庭教育上利益あるもの稀なり

第八章 儀式

支那人の禮式には揖跪叩の三種あり揖とは之をコユックと譯し其方法兩手を握りて其内側を相接し之を顔面の高さに舉上するを云ふ跪とはヒザマヅクの謂にして兩手は之を自然に垂下し上半身を稍前方に屈しつゝ右足を後に引き右膝を

地に附け右肩を稍前に出し眼を受禮者に注ぐなり此時左足は膝關節に於て直角に屈す叩とはタ、クの謂にして額を地に叩き附くるを云ふ叩き附くるとは甚だ極暴なるに似たりと雖も實際極めて軽く地に叩き附くるにあり此時兩手は充分に開きて肘關節を外面に向はしむ揖は多く人民相互の間或は官吏よりの答禮或は賓主の禮に用ひられ跪叩は子の父母に對し臣の君に對し或は卑幼(青年)のもの尊長に對し或は最下級の官吏高級者に對する時若くは從僕主に對する時等に用らるゝものなり

○文官相互の禮式

賓客先づ門に入れば客の從者右を通ず關人(門房)に在るの所謂門番なり入りて之を主人に告ぐ主人此に於て衣冠を整へ恭しく大門内に出迎へて賓客に揖す而して客を内に導き門并に階段を過ぐる毎に主人謙遜して賓に讓る入りて賓主皆北面して再拜す是皇帝に向て再拜するの意なり主人賓客の爲めに西に面したる正座を設けて之を讓る賓客禮を述べて大に之を辭するも主人固く請ふて止まず賓茲に於て正座に就く而して客又主人の爲めに正座を東面に設けて主人に勸む

主人賓に揖して始めて座に就き執事茶を饗進す賓茶を受けて揖すれば主人之に答揖し茶を飲み所要を談じ談終れば客暇を告ぐ主人之に答揖し賓客階を降れば主人又降りて之を送り門に及びて客揖し主人に答辭す此時賓客別送送ルナカレの意と云ふも主人は不送送ラズ々々々と云ひつゝ大門外に出で賓客の輿に乗じ或は馬に乗るを見送り而して後主人内に退く尙書左都御史大臣にして從一品の官(大學士)正一品官に見ゆるの儀又此の如しと云ふ若し賓客にして其階級下等下位のものに在れば主人正座を客に勸むるも客は切に之を固辭し主人をして却て正座に就かしむ二品以下の官(大學士)に見ゆる時主人は之を儀門(大門)内に迎へ大門外に送る而して輿馬に乗るを見ず科道が左都御史副都御史尙書に見ゆる又此儀に同じ五品以下八品官が大學士に見ゆる時は主人堂階の下に客を迎へ客は東階に就き主人客を導き入れば客は北面して拜辭し三揖す主人は東に面し之に答揖す客主人に向ひ正座に就かんことを勸むるも主人辭して之に讓る客固く請ふて止まず此に於て遂に主人正座に就く客揖すれば主人之に答へ賓は西面し主人は東北面して座し辭退三揖すること始めの如し談終りて客暇を告ぐれば主人は

之を二門外に送るを例とす

○北京に於ける屬官が長官に見ゆる時の禮
屬官始めて長官に見ゆる時は公服を着して官署に到る首領長官引て東側の階より銜名履歷書を各長官の座案に呈出す而して屬官座に向ひて揖するや長官席を立ちて之に答揖す凡了屬官揖すれば長官必ず皆揖す辭し出づる時は長官之を二門外に送る屬官は大門を出で稍遠ざかりて始めて輿馬に乗ず大學士に見ゆる時又同じとす

○武官相互の禮式

今支那武官の階級を本邦武官の階級と對照せば左の如し

- 提督 (中將) 總兵 (少將) 副將 (大佐) 參將 (中佐) 遊擊 (少佐)
- 都司 (大尉) 守備 (中尉) 千總 (少尉) 把總 (少尉候補生) (見習士官)
- 外委千總 (曹長) 外委把總 (軍曹) 額外外委 (伍長)

○武官相互に於ける通禮

始めて長官に見ゆる時は必ず銜名履歷書を具するを通規とす副將即ち大佐が提

督に見ゆるには先づ轅門外に下馬し門吏之を提督に稟申す副將は公服を着して佩刀し左門より入りて堂に上る堂に入れば北面して稟參し辭して三揖す(北面して再拜するは皇帝を拜するの意にして以下皆同じ)提督は西揖面して答揖す(主人之に答揖するは客に對してなすにあらず同じく皇帝に向ふなり)而して提督正坐すれば副將侍坐し茶終れば辭して退き三揖すること始めの如し此に於て提督は之を階下に送るなり

副將(大佐)が總兵(少將)に見ゆる時は堂後の屏門に迎へ送るに屏門外に至る其坐法は副將東に座して西面し總兵は西南に座して東北面す其餘は提督に見ゆるの儀に同じ凡そ副將揖すれば總兵官は皆直立して答揖す

參將(中佐)遊擊(少佐)が提督に見ゆるときは一跪三叩の禮を行ひ畢て三揖す之に向て提督は起立して答揖す坐して茶の終るを待ち揖を行ふこと始めの如し然れども提督は起立して送らす餘は副將に見ゆるの儀に同じ其總兵官に見ゆるは副將の提督に見ゆる儀に同じ

遊擊が所屬の副將に見ゆるときは副將出で、之を送る他は總兵を見るの儀と同

都司(大尉)守備(中尉)が提督に見ゆるときは北面して跪き自己の官姓名を宣べて三叩す提督坐して之を受く提督之に坐を命せず西面して地に席して坐す辭し出づるには三叩して退く提督は起立せず公事の爲めに謁見するときは常服を着して佩刀し官姓名を唱へず餘の儀は前と同じ都司守備が總兵官に見ゆるときは旁坐して茶を出す餘は提督に見ゆるの儀に同じ又自己の管轄内に於ける副將に見ゆるときは街名を宣せず揖すれば起立して答揖す餘は總兵に見ゆるの儀に同じ都司守備の管轄内に在る參將遊撃を見るや初めて見る時は庭に禮を行ひ常見なれば三揖す參將遊撃坐に就けば都司守備其傍に坐す茶終れば三揖して退く參將遊撃は出で、之を送る揖すれば皆必ず之に答ふ餘は副將に見ゆるの儀に同じ若し管轄にあらざる守備なれば互に同揖し出づれば送て屏内に至る

千總把總(少尉)并に見習士官が提督總兵副將參將遊撃に見ゆるときには皆坐せず餘は守備が提督に見ゆるの儀に同じ千總が管轄内の都司守備に初めて見ゆる時は庭に禮を行ひ都司守備之に答揖す常見なれば一揖して坐に着す都司守備正坐

し千總傍に坐す而して茶終れば出づ餘は守備が遊撃に見ゆるの儀に同じ若し管轄内にあらざれば三揖して之に答揖す茶終りて出づれば送りて屏外に至る把總が都司守備に見ゆるに當り初見なれば三叩の禮を行ひ都司守備之に答揖す常見なれば一揖して傍に坐し茶終れば出づ都司守備之を送らす餘は遊撃に見ゆるの儀に同じ

○文武官相見ゆるの禮式

提督總督に見ゆるには中門より入りて儀門に至り此處に下馬す總督之を大堂の檐下に迎へ揖して譲り入る入て堂に上れば三揖し總督正坐に就き提督又坐す此時若し提督世職を兼ねるものなれば總督東に坐して西面し提督西に坐して東面す談終り提督辭し出づれば總督送りて堂の檐下に至り馬に乗るを見て退き内に入る總兵官總督に見ゆるには先づ總兵官儀門に至りて馬より下り總督之を送迎する必ず階上に於てす總督之に答拜する時は(即ち返禮に行くとき)皆堂の檐前に於て輿を下る而して總兵官は之を儀門外に送迎す

提督總兵官が巡撫に見ゆるときに於ても均しく互に賓主の禮を行ふ

副將總督に見ゆる時は大門外に於て馬を下り左門より入る初見の時に於ては銜名履歷を具し公服に更め拜答す常見なれば只佩刀するのみ均しく北面して三叩し西面して侍立す茶終れば三揖して退く副將初めて巡撫に見ゆるときは官姓名履歷を具して三揖し常見にても亦三揖す巡撫は正坐し副將は傍座す辭し去るに臨みて又三揖し送りて堂後の屏内に至る副將學政巡漕鹽政に見ゆるには同じく銜名を具し大門外に於て下馬し儀門によりて入る均しく庭に迎へて堂に昇れば三揖す而して履歷書を呈して揖す此の如くして東面に座せば茶を出し出入に隨行す堂を降れば三揖し送て三門外に至る答禮には名刺(名刺)を用ひず參將遊擊以下の官が總督に見ゆるには一揖三叩の禮を行ふ

參將遊擊が巡撫に見ゆるには大門外に於て下馬し左門より入りて侍座す迎送は檐下に至る餘の儀は皆同じとす

都司初めて巡撫に見ゆるには出で、衣を持へ入見すれば茶を待す常見には都司守備全く屬禮を行ふ各營中軍守備巡撫に見ゆるときは全く屬禮を行ひ迎送せず」千總が巡撫に見ゆるときは一跪三叩の禮を行ふ

副將參將遊擊都司が司道府廳と見ゆるときは賓主の禮を行ひ守備が司道に見ゆるには銜名を具し大門の外に下馬し中門によりて入り迎送するに檐下に至る府廳と相見ゆるには賓主の禮を行ひ千總府廳と相見ゆる亦之に同じ

因に曰く司道府廳とは道臺知府知縣を云ふ又兵備道臺(兵力)を有する道臺を云ふが部下の都司以下に對しては該部下が上官に對するの禮を行はしむ

司道運使が提督に見ゆるには儀門に於て輿を下り迎送は堂の檐下に於てす而して提督正座し司道官等僉存座す提督之に答揖するには儀門に於て下馬し儀門外に於て迎送を爲す總兵官に見ゆるには賓主の禮を行ひ知府道知通判が提督に見ゆるには大門外に於て輿馬を下り中門によりて入る其迎送は檐下に於てす提督正座に就けば知府同知通判侍座す總督官に見ゆるには二門外にて輿馬を下り階上に於て迎送す餘の儀及總兵官の答拜は司道が提督に見ゆるの儀に同じ

州縣に提督及總兵官に見ゆるには大門外に於て輿馬を下り提督に見ゆるには左門より入りて迎送せず總兵官に見ゆるには中門より入り總兵官は檐下に至りて迎送す提督總兵官正座すれば州縣侍座す副將に見ゆるには總兵官に見ゆるの儀

儀式

に同じ

因に云ふ州縣とは知州縣令を云ふなり

參將遊擊都司守備千總等相見ゆるときは賓主の禮を行ひ八九品以下の雜官が提督并に總兵官に見ゆるときは一跪三叩の禮を行ひ總督各鎮に臨みて閱兵をなすときは總兵官は總督を城外に迎へ道路の右側に拱揖し隨行して演武場に至り總督の坐に昇るを待て總兵官堂に昇り北面し稟參して辭す而して上天に向て三揖すれば總督坐を出で、答揖す總兵官傍に坐して武を閲し畢れば總督輿に乗る總兵官の道傍に提送すること總督の來りし時に同じ

○滿漢官吏相互の禮式

滿州の官吏漢官吏と相見ゆるの禮 鎮守將軍副都統が督撫提督等と相見ゆるには賓主の禮を行ひ道臺以下の官吏が將軍に見ゆるには總督に見ゆるの儀式に同じく副都統に見ゆるには總兵官に見ゆるの儀式に同じく副都統に見ゆるの儀に同じく男爵に對しては副將に見ゆるの儀に同じく輕車都尉參領には參將に見ゆるに同じく騎都尉副參領には都司に見ゆるに

同じく雲騎尉并に五品官に對しては守備に見ゆるの儀に同じく協領參領が督撫に見ゆるには道臺と同じく佐領防禦等の官が督撫に見ゆるは知府と同じく驍騎校が督撫に見ゆるは州縣に同じく餘は皆賓主の禮を行ふ

○師弟相見ゆるの禮式

一國學師弟子相見ゆるの禮 國學生初めて國子師國子先生に見ゆるときは名刺を具し公服して學堂に至る國學首領官弟子を引て東の階段より昇りて堂に至り北面して三揖す師起て之を受ければ左側に侍立して西面して教を受く畢れば三揖して退く若し燕見ならば名を通じ召くを埃て内に入り師之を階上に迎ふ此に於て弟子階を昇りて揖す師門に入れば隨て門に入り北面して再拜す而して師西面して之に答揖す師正坐に就くや師は弟子に坐を命す弟子北面して揖し師は西南に位置して東北面し弟子西面す茶出れば揖して安否を問ふ揖して辭し退くや北面して三揖す師皆之に答揖す師出で、之を送るや前に進み弟子之に隨ひ二門外に及びて弟子三揖し師の入るを埃て弟子迺ち退く翰林院庶吉士が大學士及教習庶吉士に見ゆるの儀亦之に同じ

儒學師弟子相見ゆるの禮は國子生國學士に見ゆるの儀に同じ

一、學業を受くるの弟子師長に見ゆるの禮式 初見の際師未だ出でず先づ入て席を西位に設く是れ師をして此處に坐に就かしむる爲なり而して弟子等堂下に俟つ師出で召見すれば堂に入り北面して再拜す師起て之に答揖すれば謹んで安否を問ひ師之に坐を命すれば即ち侍坐し若し師問を發せば起て之に答ふ辭し退くに及びては三揖の禮をなし師之を送らす常見の際には則ち侍坐し業を受くるときは則ち起ち益を請ふとき則ち起つ師教ふれば立て之を聽き之に坐を命すれば則ち坐す師質問するあれば立て之に對し朝に入て一揖し暮に出で、一揖す又學を同ふせる弟子相互の間に於ても均しく年齢の順序を以て朝夕一揖の禮を行ふ

○賓友相見ゆるの禮式

士人相見ゆるの禮は賓客門に至るや從者先づ其名を通す主人出で、大門外に之を迎へ揖す次で門并に階段に至る毎に揖して之を讓り堂に昇れば主賓均しく北面して再拜す主人先づ賓客に對し正坐に就かんことを請ふ賓之を辭す主人之を強ひ自ら正坐の左側に就き賓遂に正坐に就き主人と相對して坐す斯くて席定ま

らば賓客東位西面し主人は西位にありて東面す茶を飲み談終れば賓暇を告げて退き揖す門及階に至る毎に揖して辭し主人均しく答拜す而して賓を大門外に送る揖すること初の如し若し父の朋友に相見ゆるときは尊長に對するの禮を以て之を待つ

○卑幼尊長に見ゆるの禮式

卑幼則ち青年が尊長に見ゆるのときは先づ門に至り從者名を通すれば外に俟ち尊長召見を許せば階を昇り北面して再拜す尊長西面して答揖し座を命すれば尊長の座するを俟て傍に坐す茶出づれば揖し叙語畢りて辭し去る時三揖す尊長凡て之に答へ出づるに之を送らす尊長來りて青年を見る時は之を大門外に迎送し其禮法座席凡て前の如し

重編留青所集に曰く

案儀禮十七其一曰士相見而不及公卿大夫蓋相見之禮所謂明尊卑長幼之序爲士者誠能於周旋揖讓進退應對之儀講求有素一旦置身通顯其所以事長官接同僚者舉而措之裕如矣故相見及昏喪昏之禮必自士始所謂舉一以該百操本以見

末也他如曲禮少儀諸記於尊卑長幼言之甚詳其大要亦以相見為始蓋士君子於相見之初不致其敬將居住並行無所不至固非所以事尊長即處交游亦必相狎相優而終至於相誘傲慢之風習就之習皆爭鬪訟獄所由起要其始不能攝以威儀所由致也

○平民間の禮

平生相會する時は點頭を以て禮となす久しく相會せずして再び見るものは長揖し又年首相賀には長揖の禮を行ふ

○貴人下賤に對する禮

賤者跪拜すれば長揖を以て答へ賤者請安安否を問ふことすれば點頭を以て答ふ

○賤者貴人に對する禮

平時相見ゆる時は請安を以て禮となし年節其他接見往見皆跪拜を以て禮となす

○親族間の禮

平時年節共に長幼を分ち貴賤賤貴の禮をなす

○途上の禮

平民又は同位のもの互に相點頭す而して賤者幼者の貴人長者に對する時は路傍に拱立して鞠躬して禮となし貴人賤者に對し長者幼者に對しては點頭を以て答禮とす

○同僚間の禮
初會見及年賀等に於ては互に跪拜し平生の途迎には長揖を以て禮となす

○親子間の禮
年節祝賀には子女四拜し親は端坐して之を受く相見ゆるには拱立して鞠躬せず親も亦點頭せず
請願のとき又は叱責せらるゝときは跪して其命を聞く貧賤苦力の如きものは禮なく只年始に於て叩頭をなすのみ

○兄弟間の禮
尋常の時は弟拱立し年賀祝節には互に相拜す

○初會の禮
平民は其紹介者の有無に拘はらず皆な長揖す

○朋友間の禮

平生相見ゆる時は一點頭をなし或は之をなさゝることあり久しく相會はざるものは長揖し或は互に相拜す祝賀のときは對拜す

○物品受授の禮

贈者は禮帖の寫し及菲儀數色を呈し受くるものは謝禮帖を呈す對面すれば一揖して禮をなし又は請安す贈者も又之に返禮す

用紙は單大の紅帖を用ひ年節には禧敬と書し誕壽には祝敬と書し凡て他の喜事には賀敬と書す又葬儀には奠敬と書す

○客の待遇法

常見の客にして坐接長からざるものには茶を饗するに止まるも久坐するものには茶と菓子とを供ふ常見の客にあらざるか或は賓客なるときは茶を饗し次て皿に盛りたる菓子を出す少くも二皿を出すべく多きは六皿又は八皿を出す其菓子は茶食舖を以て上品となし他の蒸食燒餅等は饗すべからず此等は常見の客に出すのみ又茶は貴客には蓋ある茶碗(大さは我國の食用茶碗の如くなれど深し)を茶

船(茶船とは我國の茶托なりに)載せて供す

貴客に茶を供するも飲まざれば持ち去る若し其茶冷ゆれば暖きものと交換す

○宴會の種類

年始に衆を會して宴を開くもの之を吃年茶と云ふ則ち古昔の大嘯の遺習なり

婚姻 知人親族使者に書帖と禮金又は物品を持參せしめ日暮に至り賀し自ら婚

家に至る至れば即ち宴を開く之を吃喜酒と稱す此宴に在りては通常六人を以て

一卓となす富貴のものは百卓に至るものありと云ふ

喪弔にも亦宴を開く弔者先づ使者をして奠儀の書帖及禮金或は禮物を喪家に寄

贈し弔者喪家家祭の日と出殯の日に於て其午前中自ら行て弔す此際宴を催す又

六人を一卓となすも富者は三四百卓に至ることありと云ふ

壽誕 物を贈ること婚娶の儀に同じく祝者は天夕に至りて其家に至る又六人を

以て一卓とし百卓に至るものあり

請客 平生の小宴にして留送別等各種の意味によりて開くものを請客と稱し卓

の人数は一定せず

昇官及登科の宴會は賀者多くして盛會なり此宴も又六人を一卓とす
接風 朋友他より歸り來るか或は他行の友人來る時は邀へて宴を開くを云ふ
餞行 即ち送別會の事なり

公請 數人にして一人の客を招くを云ふ
請大客 一人にして數客を招く宴を云ふ

婚壽科第其他の宴に於ては客皆酒を酌み滿盃なるを持ち之を舉げて壽を唱ふ而
して宴開くるや直ちに拇戰(拳なり)をなす然れども喪吊の席には酒を用ひず又舉
盃の事なし宴會に於ては客至れば必ず熱濕布を供し客之を以て自己の顔面頸部
及頭髮を拭ふ是れ街頭にて被りし塵埃を拭ひ去らんが爲めなり又宴中に於ても
數回之を呈することあり宴終れば又之を供す

宴席

上饌席

滿漢朝席 此は高貴の宴席の謂にして食品の種類甚だ多く少年全豚野獸鹿兎等
の脯ありて山海の珍味佳肴備はらざるなし

上上官席 此は貴官大家等の宴にして野獸之れなきも全羊全豚其他の佳肴殆
んど全備す

三十二頭碟及二十四頭碟 共に上上官席に次ぎ全羊全豚なきも亦盛宴なり

十六頭碟 以上三種は富家の宴席壽婚等に之をなすものなり

大八八上席 略ぼ二十四頭碟に同じ

八大碗八小碗 皆富豪の宴とす

中等の饌席 此種の席は富家の喪事又は中流の婚家の宴に用ふ

下餞饌席 八大碗無碟にして平民の婚喪に於ける席とす

其他小八八八冷碟八大碗四大碗四小碗等あり

一地方の官吏轉じて其住地を去るや管下の人民は送別の意を表せんが爲めに萬
民の衣傘なるものを贈る則ち人民が官吏に對する送別の儀式なり蓋し是れ人民
が官吏在任中の徳政を感謝するの意を表すものにて其の衣傘を贈るは惜別の情
止む能はざるの極を示すにあり

故に特に今回の事變に際し彼等は北清各地に駐屯せる各國軍隊に對し其徳政を

感謝すとの名目を以て此衣傘を贈るもの多かりしなり

第九章 物産

直隸省は南清に比して土地一般に瘠土なるが爲め農産物は僅かに省内に分配するに止まり他省或は外國に向て輸出すべきもの殆んど皆無と云ふべし唯僅かに骨粉の一品あるのみ

○骨粉

骨粉 は牛骨山羊骨を以て製するものなり其多くは日本に輸出すと云ふ乾燥骨粉百斤に付支那錢五百文にして一年の産額二百萬斤と稱す

○雜穀

米 は直隸省に於て一般産出せず唯西太沽の南方新城に僅かに産するのみ米一石我百六十五六斤十元を價す

粟高粱 等を多く産出すれども他に輸出するの餘裕なし
麥 は多少産出せざるにあらざるも多くは南清地方より輸入す

大豆 黄豆黑豆綠豆紅豆等あり小豆と共に王慶坨に産出す其價每一石三四圓な

○茶

茶は南清より輸入し直隸省に於ては産出せず支那茶は露西亞に多く輸出せられ一年間一箱九十斤入のもの五十萬箱に昇ると云ふ

○食鹽

食鹽 其産額甚だ多量なりと雖も其額詳ならず其事業は官業にして普通人の製造を許さず官より元請人に販賣するは百斤二十錢内外なるも土人の買収するときは四元内外に達すと云ふ

○生絲

生絲 直隸省に産出せず織物も皆南清地方より輸入す本省に於ては他州より來る織物を染色するに過ぎず

○毛皮類

毛皮類 は主として北方宣化府より來り直隸省中に製するものは狗毛皮位にして庫倫寧夏歸化城等より産するものを尤も良とす英商新泰興のみにて毎歲賣

收する額價は百萬兩を下らずと云ふ當時は毛皮類甚だ下落せり而して其價額は毛皮の種類により甚だしき差異あり

棉花砂糖類 は共に北清より來り北方に産出せず

○蔬菜

白菜 は北清の名物にして煮て食ふべく或は漬物として食すべし殊に漬物に宜しとす其産出尤も多きを唐山とす御河に於ても亦多量を産出す然れども唐山のものは御河の菜に若かざるなり天津附近の住民は好んで御河の菜を食ふ其價每百斤五六十錢なりとす

蘿蔔 は河海一帯の地に最も多く産出す然れども小劉莊に産する青蘿蔔を最良とす其他紅白水等の蘿蔔あり北清の住民は皆生にて之を間食せり每百斤約一圓内外なり之を煮るや其味芋の如し

韭菜 北清の住民は皆之を嗜み彼等は皆食後之を生にて嚼食す故に口臭甚だしく近くべからず

蓮根 最も多し勝芳に産す又臺頭西淀にもあり每百斤の價三圓内外にして凡て

白連を最良とす
○水産物(乾物)

蛤貝 日本にて瀬戸貝と稱する貝の身を乾したるものなり
海蜃 海中に産するものにして形雲片の如く刀を以て割り取り明礬水に浸し陰
乾す日光に晒すときは化して水となると云ふ半透明にして紙の如く薄し之を
嚼めば附着せる白色粉末に鹽味あり木耳の如し
江瑤柱 一に瀬江瑤柱と云ふ直徑一仙迷突高一仙迷突の貝の柱(俗に足と云ふ)を
乾したるものなり
魚頭 其幅一乃至三仙迷突長さ六乃至八仙迷突の半透明なる堅韌物にして脂肪
の臭氣あり
魚翅 沙魚の軟鱗にして鹽藏後乾したるものなり日本大阪より來ると云ふ
燕窩 南洋の産にして燕或は水燕又海燕と稱する鳥が海藻一説には小魚と云ふ
を集め巢となしたるものなり其形方錘狀にして扁平且つ一面に向て彎曲陷凹
す半透明にして白色なるを佳品とす其價一斤二十三圓にして長さ十二三仙迷

魚肚 其形扁平長橢圓にして半透明なり鱈魚の腹内にあるものにて其長さ十

四五仙迷突幅六仙迷突なり浮囊と稱するものならん

魚唇 其厚さ一仙迷突未滿幅二仙迷突未滿長さ十五仙迷突計りの長方柱狀をな

せる堅韌物にして殆んど透明にして淡黄色を呈す鱈魚の唇なりと云ふ

海參 海參の乾物にして大小種々あり四仙迷突内外のものを最も佳とす

面魚乾 白魚の鹽藏を乾したるものにして雜魚の如し

魚骨 鱈魚の骨髓より製したるものにして其形不整なり其色半透明にして汚

黄色のものなり

蝦仁 蝦の殻を去りて乾したるものとす

蝦子 蝦の殻を去り粉になしたるものなり

海帶糸 切寬布なり

鰯 干鰯なり

洋粉(寒天) 専ら蔬菜の饅に加へて素食す日本より多く來ると云ふ

北清事情大全上卷終

明治三十六年一月十日印刷
明治三十六年一月廿四日發行

(北清事情與附)
上下二冊定價金壹圓

著者 香川縣仲多度郡筆岡村二百十八番戶
前田政四郎

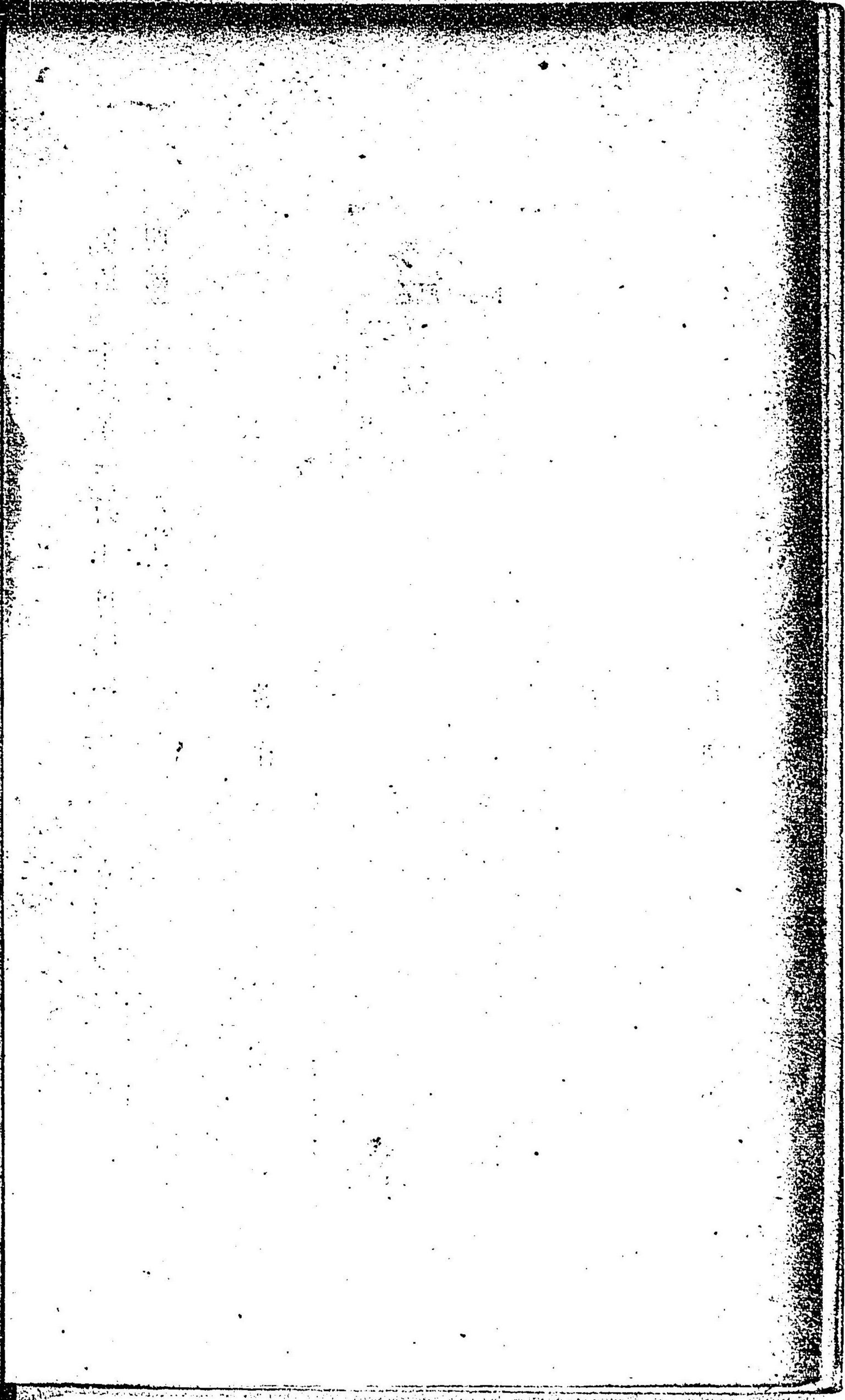
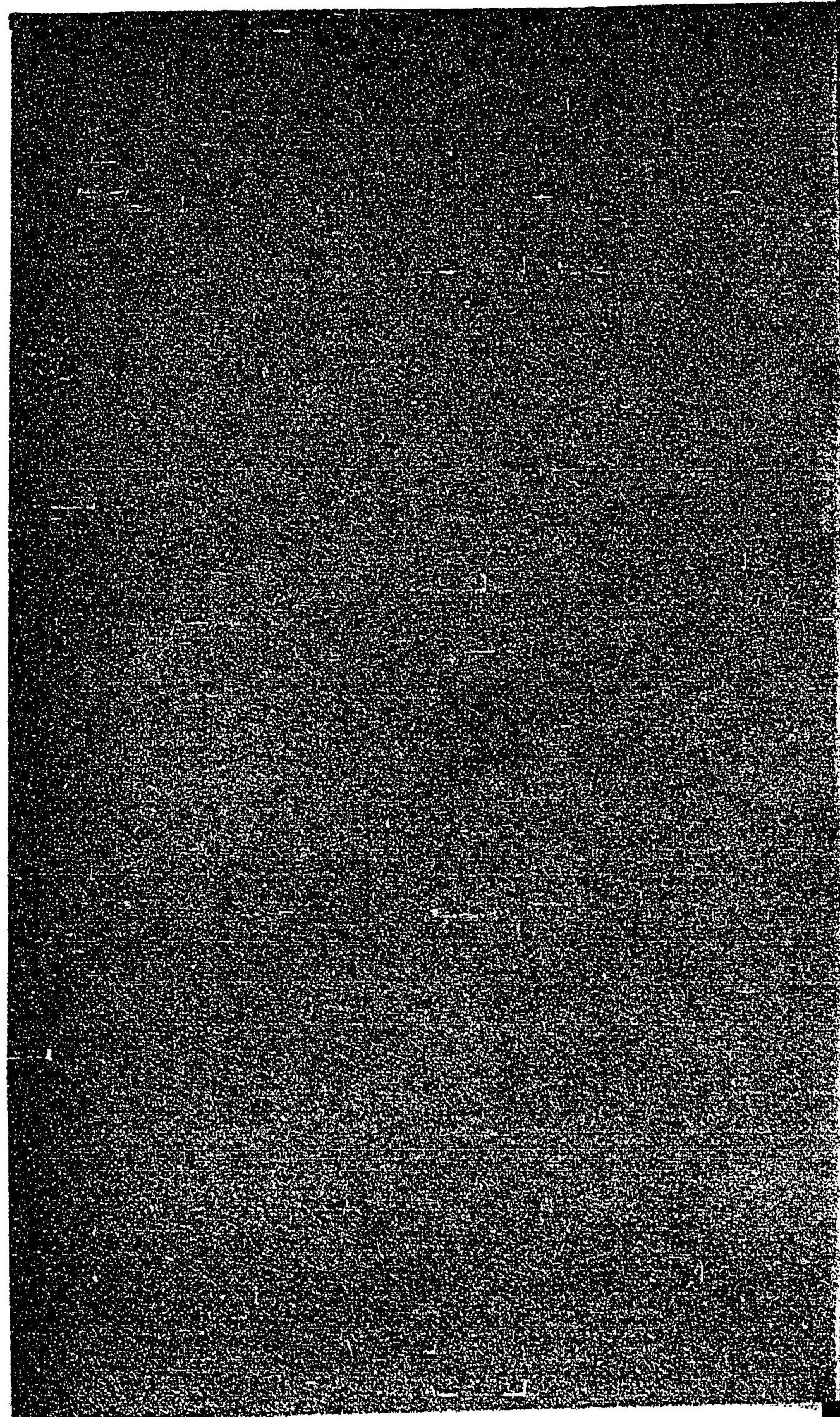
發行者 東京市京橋區五郎兵衛町二十一番地
小林又七
(電話本局參千貳拾番)

印刷所 東京市麴町區陸軍省構内
小林又七出張所

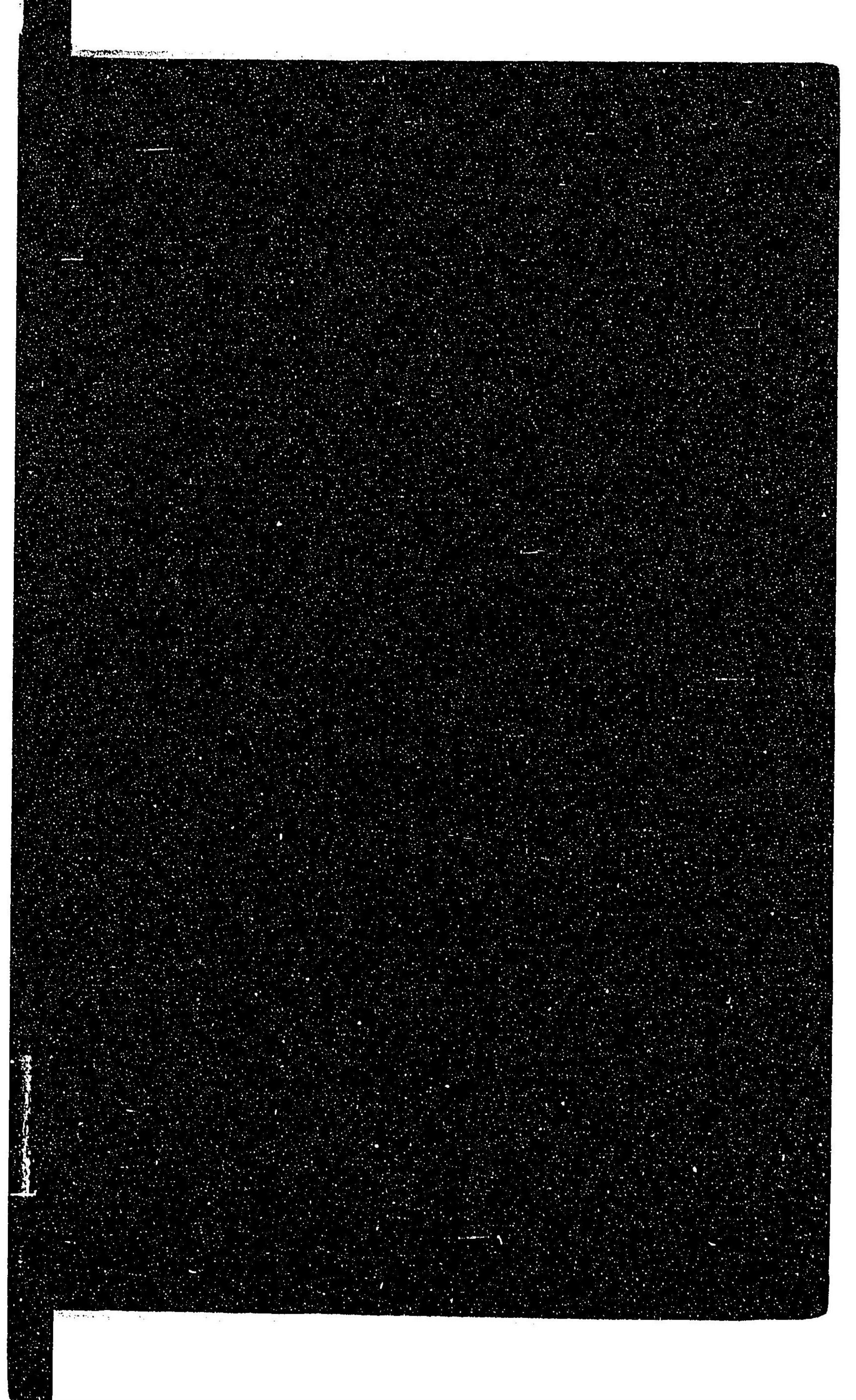
發賣所 東京市麴町區華町二十一番地
小林又七支店
(電話番町百九拾番番)

發賣所 仙臺市南光院町四番地
小林又七出張店





86
2
328



86
328

026665-001-9

86-328

北清事情大全

前田 政四郎/著

上

M36

ADD-0354



